

(第3種郵便物認可)

淡路松帆と出雲の銅鐸

△松本 岩雄△

1996年に加茂岩倉遺跡(雲南市)から史上最多の39個の銅鐸が出土してから、今年はその20周年を迎える。1984、85年に発見された出雲市の荒神谷遺跡(銅劍358本、銅矛16本、銅鐸6個)とともに列島の青銅器分布を一気に塗り替えることとなり、その後の青銅器研究を大きく進展させる推進力となった。

銅鐸や大型化した銅矛・銅劍・銅戈は、弥生時代の青銅器で祭器と考えられているが、具体的な使用法など今なお不明な点が多い。銅鐸はなぜ埋められたのか。日本考古学最大の謎といわれている。

昨年の4月、謎を紐解く手掛かりとなる発見があった。兵庫県南あわじ市松帆で確認された7個の銅鐸である。出土地点は不明であるが、松帆地区の数カ所から集められた砂の中から見つかったという。この地は淡路島の南西端にあたる夕日の名勝地「慶野・松原」と呼ばれる砂洲で、荒神谷遺跡の調査時から気になっていた地域であった。というのも、この周辺から江戸時代以降10個の銅鐸(3個現存)、さらに松帆の古津路遺跡から14本の銅劍が出土しており、弥生

人が青銅器を埋納する聖地として意識していたと思われるからである。

松帆銅鐸は、大きな銅鐸に小さな銅鐸を収めた「入れ子」銅

「舌」が謎解く手掛かり

使用法や埋納時期探る



淡路島で見つかった銅鐸と舌(兵庫県南あわじ市教育委員会提供)

鐸が3組6個あり、加茂岩倉遺跡の状況と共通している。今回の発見で最も注目すべきは、音を鳴らすために内部に吊り下げられた「舌」と呼ばれる青銅製の棒が7点揃っていたことである。

銅鐸は佐原真氏等の研究によれば、吊り手(紐)の型式から菱環鈕式↓外縁付鈕式↓扁平鈕

式↓突線鈕式の順に変化するとされ、扁平鈕式までは実際に鳴らしていたと考えられている。しかし、500個以上出土している銅鐸には「舌」を伴う例はほとんどなく、わずかに鳥取県泊銅鐸や南あわじ市中の御堂銅

鐸などで知られているのみであった。木などの有機質素材の「舌」であったから残らなかった。埋納にあたって祭器として使えないように「舌」を外したとする説などがある。

松帆の「入れ子」銅鐸(3組6個)はすべて「舌」を伴い、壊れていた1個の銅鐸にも「舌」が確認された。しかも、銅鐸の吊り手や舌の孔には紐が残っており、具体的な装着状況が分かる稀有な例である。舌の下半部と銅鐸内面の突帯(音を発する際に舌が接触する部分)には、磨滅痕がみられることから、使用の方法や頻度も推測される。

埋納時期は、古くは弥生時代から古墳時代への転換期と考えられていた。最近では、荒神谷や加茂岩倉遺跡などの青銅器型式の組み合わせから、弥生中期末から後期初頭(1世紀初めごろ)に第1段階目、弥生終末期(3世紀中ごろ)に第2段階目の埋納がなされたとする見解が

出雲では、集落構造の変化・四隅突出墓の築造などの大きな社会変革と連動して第1段階の青銅器埋納があったとみている。第2段階の埋納は前方後円墳の出現と関連している。

ところが、松帆銅鐸は、菱環鈕式と外縁付鈕式という古い型式群のみが存在し、中期ごろに埋められた可能性も出てきた。荒神谷銅鐸も菱環鈕式・外縁付鈕式の組み合わせであるが、中広形銅矛と二緒に出土していることから、中期末〜後期初頭の埋納を推測している。

松帆銅鐸の場合は、紐の放射性炭素年代測定も可能で、従来とは別の方法で年代推定ができる。

銅鐸埋納の謎を解くには、使用法や埋納時期をまず明らかにしてこそ、その歴史的背景に迫ることが可能となろう。松帆銅鐸は使用法や埋納時期を知る上での基本資料といえる。これまでにない多くの情報を含む松帆銅鐸の調査研究の進展は、弥生社会像を解明する上で、見逃せないものとなる。

(鳥根県立八雲立つ風土記の丘所長)

松本所長が講演する「風土記の丘教室」が11日午後2時、松江市大庭町の鳥根県立八雲立つ風土記の丘である。資料代200円(申し込み不要)。

道草派の文学ノート

違いだ」と彼女は言うが、たの。誰だったの。間違 ミステリーとしてこの作られた場合、その人間は裁 おかしい。そんなことはない。生々 えていたの?」という問 品を読むと、人間は過去 かれたことなるか。